

中庄新川家文書研究会報告六 中庄新川家文書の研究

鶴崎裕雄
大 利 直 美

*キーワード

中庄新川家文書研究会・堺伝受・堺天神の社僧盛誉

一、中庄新川家文書の研究をふりかえって

平成二三(二〇一一)年以降、鶴崎裕雄・小高道子・山村規子・近藤孝敏・倉橋昌之・大 利 直 美 が国文学研究資料館の調査員になったのを機に、「中庄新川家文書研究会」を組織し、数点の共同研究の論文を発表、毎年三月末日に刊行される国文学研究資料館の『調査研究報告』に掲載されている。

これまで、『調査研究報告』に掲載の中庄新川家文書を使用した調査研究論文は次のとおりである。

『調査研究報告』三六号、平成二八年(二〇一六)、鶴崎裕雄の「『新川盛政駿河下向記』の史料的研究」。中庄新川家三代目当主である新川

盛政が、駿府の徳川家康の許に、同じく新川一門の貝塚御坊(後の願泉寺)願泉寺卜半らと連れだつて参上する道中記で、名所・旧跡を尋ねて歌や句を記している。この道中記の背景には、和泉国貝塚寺内町内部の相論があるが、下向記の内容は、名所や旧跡の和歌や句に絞られている。

さらにこの論文では、盛政が駿府で家康に目通りした後には催された、和漢聯句の原懐紙も翻刻・紹介している。この和漢聯句には文殊院勢誉・道春(林羅山)など、家康側近の文人たちが一座した。

『調査研究報告』三七号は、平成二九年(二〇一七)、「堺伝受と和歌・連歌―中庄新川家文書研究会報告 二」として、鶴崎の「中世堺と堺古今伝受の土壌」、小高道子の「解題と翻刻―中庄新川家蔵 古今和歌集 聞書(仮題)」、大 利 直 美 の「翻刻と解題―慶長三年二月「連歌・和歌会書留」・慶長五年「陪八月十五夜月宴和歌」―」を載せる。小高の論考

により、「古今和歌集聞書（仮題）」が「堺伝受」そのものであることが分かり、注目されることとなった。また大利は、その伝受を受けた盛政の歌会と連歌会の作品を翻刻・紹介した。合わせて紹介した「陪八月十五夜月宴和歌」は、関ヶ原合戦に東軍方として盛政が出陣する中庄新川家一門の直前の歌合である。

『調査研究報告』三八号、平成三〇年（二〇一八）には、「中世都市堺と宗祇・肖柏―中庄新川家文書研究会報告三―」として、鶴崎の「堺伝受の一流流―連歌師宗祇の場合―」、小高の「中庄新川家蔵『伝受次第』と新川家の古今伝受」、山村の「史料紹介「新川宮内少輔盛政伝（わが老の記）」が翻刻・紹介された。小高の紹介では、堺伝受が、確実に新川家に受け継がれていることが明確になった。

『調査研究報告』三九号、平成三二年（二〇一九）では、「堺伝受の周辺―中庄新川家文書研究会報告四―」として、鶴崎・大利の「翻刻『紀の路御遊覧日記』」と、近藤孝敏の「翻刻と解題 中庄新川家蔵『伝受次第』」を掲載した。鶴崎・大利が翻刻・紹介した『紀の路御遊覧日記』は、江戸時代後期、文政七年（一八二四）九月、貝塚寺内町願泉寺住職ト半家事十代了真と一族郎党が、貝塚寺内町から紀州玉津嶋・和歌山城下を巡る遊覧記であり、近藤の『伝受次第』の考証は、前稿の小高の伝受の論と相まって、宗祇から肖柏へ、さらに盛政から盛明・盛里へと堺伝受が確実に伝わったことを明らかにした。

『調査研究報告』四〇号、令和二年（二〇二〇）三月、「中庄新川家文書研究会報告五―」では、鶴崎・近藤・大利が、「中庄新川家に伝わる

近世初頭～前期の和歌」で、「堺伝受」をつぐ盛政・盛明二代の和歌の懐紙や短冊などを翻刻・紹介した。

さらに、今回の『調査研究報告』四一号「中庄新川家文書研究六」では、小高・山村は「解題と翻刻 中庄新川家蔵 古今和歌集聞書（仮題）二」において、新たに発見された「古今和歌集聞書（仮題）」を紹介し、これが「古今和歌集聞書（仮題）」の続きであることを検証した。このように、中庄新川家文書は、新資料が次々と発見される文書群である。

以上が、これまでの中庄新川家文書の調査研究の報告である。中庄新川家は、平安時代の河内国長野庄の開発領主三善氏の流れを汲み、在地代官を務めてきた家で、およそ三〇〇〇点に及ぶ古文書が伝来している。これまでの研究報告は、堺伝受を受けている三代目当主である盛政を中心に報告がなされてきた。中でも小高の報告は、中庄新川家に伝わる「古今和歌集聞書（仮題）」を翻刻・紹介し、肖柏から宗祇に伝わる「古今和歌集聞書」（「古聞」とはまた内容の異なる貴重な資料であることを明らかにした。さらに、小高と近藤の『伝受次第』の検討によって、中庄新川家の古今伝受が宗祇から肖柏へと継承したもので、近世前半には盛政から盛明・盛里へと伝わったことを明らかにしている。

しかし、「古今和歌集聞書（仮題）」の以外にも、古今伝受の有り様が確認できる資料がある。今回の報告では、そのことを確認しつつ、盛政の堺伝受とその周辺を見てみることにする。

二、中庄新川家文書にみる堺天神の社僧盛誉

ここでは、前掲稿と一部重なるが、「駿河下向記」他、和歌懐紙などの資料から盛政の「堺伝受」について、枚数の都合で触れられなかったことや、その後に考察を加えたことを述べることにしたい。

まず、「新川盛政駿河下向記」を見てみると、冒頭部に「和泉国貝塚と云う所にくせちのいてきて事すますなりしかは、するかのさたに及びて下侍とて」と、同じく新川一門惣領家の佐野川新川家を出自とする貝塚下半家が貝塚寺内町の住民と「くせち（口舌）」、つまり相論をおこした際、駿河（徳川家康）から下された有利な判定（家康黒印状）に対する御礼のため、駿河に出かけた道中で、盛政が詠んだ歌や句を綴ったものである。「駿河下向記」には、処々に別筆で点と注が施してあり、巻末には「付墨 盛誉（花押）」とあることから、盛誉という人物が付墨をしたことがわかる。盛誉は、西坊と号した堺天神の社僧で、堺の連歌師であり、慶長三年二月の連歌で一座しており、宗柳から古今伝受を受けている。さらに堺天神松南院の院主でもあったことが分かっている。^①

盛誉は、所々の名所で詠んだ盛政の和歌や句に対して、「右結句、なにとそあるへし歟」、や「兩首とも殊勝覚へ候」など指導的な書人をしていいる。さらに、盛政の「此てにをは、不堪の身にはならひありとてもすへからすことなから、人に見することにしあらねは、よめしなり」ということに対して、「てにをは大かた究申候、また吟味むつかしく候」

と「てにをは」をおおかた究めた、と答えているのである。小高は、新川家に伝わる「古今和歌集聞書（仮）」の講釈は、「テニハ」の指導が多く、古今和歌集を通じて和歌、連歌を詠むための「テニハ」を伝えるために行われたとされている。^②

すなわち盛政は、宗柳から「テニハ」を重視する「堺伝受」を受けたが、その後も兄弟子である盛誉から指導を受け、伝受を身につけようとしていたことが推測できよう。

さらに、伝受の内容は、和歌懐紙にもみることができ。盛政の「詠七首之和歌」（元和三年以前七月七日）には、端裏書に異筆で「付墨五首」とあり、又、盛政の「詠二十首和歌」（元和四年三月以前）には、^③

都おもふかりのまくらもかくはかりなみたふかむるほと、きす哉

右御詠下句珍重候、第二句今すこしあるへく候歟

との指導的な書入れがある。さらに、盛政の前掲「詠二十首和歌」の和歌には、

別恋 枕さへまた取あへぬみしか夜のわかれかなしきあかつきのかね^{空歟}

かねと候へハ、理かあまり至極候てよろしからす聞え候、

連哥にハかはり、哥ハ理のつまり立ぬやうにあそハし候事、

肝要候歟

と書入れがある。さらに、

神祇 相おもふ心のまつをうへし植ていのるにかなへ住吉の神

の歌には、

恋の哥なから、祝候てめてたく覚え候歟、

連哥にハ相かハりにて墨を引く事、中くなき事、其憚多候、
別而御条なきにより如此候、かまへてく此巻物いさ、かも外
見候ましく候、

とあり、この奥に異筆で「付墨十首」と後に評点を付け、連歌と和歌の
理の違いをのべながら指導しているのが分かる。さらに、「この巻物い
ささかも外見候ましく候」と秘伝であることがわかる。点者や書入れは、
筆跡などからみて、盛誉と考えられるだろう。

盛誉は、前述のように、堺天神の社僧で松南院（西坊）のことで、『顯
伝明名録』の盛誉の項には「堺天神社僧、号西坊、自宗柳古今伝授、了
休息⁽⁷⁾」とある。彼は堺北庄の産土神、堺天神社常楽寺（現菅原神社、堺
市戎之町）の社僧であるとともに、天正く慶長前期の堺連歌壇の宗匠、
下田屋宗柳から古今伝授を受けた堺連歌師でもあった。また、彼の父は、
等恵や宗柳とも一座した堺湯屋町（現堺市堺区熊野町）の橘屋了休であっ
たこともわかる。元和前後には同社松南院の院主で、大坂夏の陣で回祿
後の堺復興期には同社を代表する惣代の地位にあった。堺連歌師として
の盛誉に関しては、文禄二年（一五九三）九月から慶長一五年（一六一〇）
九月の間、彼が一座した連歌が確認でき、また同三年二月の堺連衆の紀
州玉津島下向にも、宗匠宗柳や源光寺祐心（同寺十世・大坂円光寺五世、
一向宗僧）、吉祥院空盛（堺天神社僧、南坊）らと共に参加している。
宗柳から古今伝授を受けた盛誉は、堺在住の半井卜養や竹田薬師院主石
林円玖の両医師に古今伝授を行った。

さらに、盛政の子息、盛明が詠んだ「詠七夕七首和歌」（元和以前カ

七月七日）には、

あふ瀬夜とはなへてしりけり七夕のあくる空とてなにしのふらん
の歌に追筆の注で、

此懐紙何も珍重候、作者誰人候哉、御うらやましく候、付墨四
首内長一首

と指導しているのがうかがえる。盛明は盛政の跡を継ぎ、中庄新川家四
代当主となっている。初名新十郎、通称九兵衛尉といった。盛政から、
古今伝授を受けていることが前述した『伝受次第』によって確認するこ
とができる。

これらのことから見るに、盛誉は、新川家の人々にとつて元和年間に
いたつても変わらず指導役であったのだろう。「駿河下向記」や和歌懐
紙などからも「堺伝受」のことがわかり、近世初頭の中庄新川家は、堺
の文人たちと深く結びついた存在であったといえよう。

三、研究の成果と今後の課題

中庄新川家文書の研究成果は他にも見られる。注目されるのは、小高
による堺伝受の研究である。小高は、「堺伝受における『古今和歌集』
解釈―中庄新川家蔵 古今和歌集聞書をめぐって（『中庄新川家文書論
叢第三号『中庄新川家蔵 通号三十六号』）と「テニハ伝受とテニハの秘伝」
『中庄新川家文書研究』三二号、令和二年、三月）で、「古今和歌集聞
書（仮題）」の堺伝受を改めて論じ、「古今和歌集」講釈の中で「テニハ」

を指導していたことを明らかにした。

鶴崎の「新川盛政駿河下向記」に掲載した「慶長十六年二月十一日
和漢聯句」は、新川盛政が徳川家康に目通りした後、文殊院勢誉・道春（林
羅山）などの家康側近の文人たちと和漢聯句を詠んでいる。その作品全
文が竹島一希氏によって、和漢聯句を専門とする京都大学和漢聯句研究
会<sup>〔慶長
元和〕</sup>『和漢聯句作品集』（平成三〇年（二〇一八）二月、臨川書店）
に引用されており、慶長から元和にかけて、代表的な作品であることが
注目されよう。

また、「紀の路御遊覧日記」は和歌山県立文書館所蔵ではあるが、一
昨年一月に鶴崎・近藤・大利が、「紀行文に見る近世後期の紀州―貝
塚下半家の紀州遊覧をめぐって―」を和歌山地方史研究会で報告した。
昨年度の貝塚市民図書館内の郷土資料室で展示され、古文書講座のテキ
ストとして使用されている。展示期間中に、鶴崎・大利・近藤の講演「ぼっ
かんさんの紀北遊覧をめぐって」も開催された。願泉寺は、古くから「ぼっ
かんさん」と寺内町の人々に親しまれる存在であり、研究を地域に還元
し、地元に貢献したといえよう。

次に新川盛政は、沢庵宗彭との関係が注目される。盛政には、二点の
肖像があるが、沢庵は両肖像画に賛を記しており、盛政は、沢庵の若い
頃の弟子であった。盛政の著した辞書『配数事類』にも序文を記している。
二人の関係が親密であった事がうかがえよう。沢庵の関係資料は数多く
あり、紫衣事件以降の動きは比較的明らかになっており、研究も盛んで
あるが、元和以前はあまり知られていない。目下、近藤が資料の検討を

続けており、今後の成果が期待される。さらに、倉橋も堺市博物館学芸
員として、学問分野から地域史の調査研究をおこなっている。

中庄新川家文書の数は多く、今回の小高・山村の研究論文のように、
まだまだ何が発見するか分からない文書群である。

〔付記〕中庄新川家文書の閲覧については新川勲子様をはじめご家族の
皆様にお世話になり御礼申し上げます。

〔注〕

- (1) 笹田将樹「平間長雅の箱伝受と『堺浦天満宮法楽百首和歌』」『上
方文芸研究』五号、平成二〇年
- (2) 小高道子「堺伝受における『古今和歌集』解釈―中庄新川家蔵
古今和歌集聞書をめぐって―」『中京大学文学会論叢第三号』（『中京
国文学』通号三十六号）、平成二九年三月、同「テニハ伝受とテニ
ハの秘伝」『中京大学文学科学研究』三二号、令和二年三月
- (3) 以下、和歌は前項『調査研究報告』四〇号の鶴崎・近藤・大利の「中
庄新川家文書に伝わる近世初頭～前期の和歌」による
- (4) 木藤才蔵『連歌史論考』下 明治書院 平成二一年ほか